

# A 国 語 (50分)

答えはすべて 解答用紙 に書き入れること。

## 【この冊子について】

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子に手をふれてはいけません。
2. この冊子の2～3ページは白紙です。問題は4～9ページです。
3. 解答用紙は、冊子の中央にはさまっています。試験開始の合図後、取り出して解答してください。
4. 試験中に印刷のかすれやよごれ、ページのぬけや乱れ等に気づいた場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
5. 試験中、冊子がばらばらにならないように気をつけてください。

## 【試験中の注意】 以下の内容は、各時間共通です。

1. 試験中は先生の指示にしたがってください。
2. 試験中、机の中には何も入れないこと。荷物はいすの下に置いてください。
3. 先生に申し出ればコート・ジャンパー等の着用を許可します。
4. かぜ等の理由でハンカチやティッシュペーパーの使用を希望するときは、先生の許可を得てから使用してください。
5. 試験中に気持ちが悪くなったり、どうしてもトイレに行きたくなったりした場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
6. 試験中、机の上に置けるのは次のものだけです。これ以外の物品を置いてはいけません。
  - ・黒しんのえん筆またはシャープペンシル
  - ・消しゴム ・コンパス
  - ・直定規 ・三角定規一組 (10cm程度の目盛り付き)
  - ・時計 ・眼鏡筆箱も机の上には置けませんので、かばんの中にしまってください。
7. 終了のチャイムが鳴り始めたら、ただちに筆記用具を置いてください。
8. 答案を回収し終えるまで、手はひざの上に置いてください。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

次の文章を読んで後の問に答えなさい。 丸数字は形式段落の番号です。\*のついた語句は注があります。

① 午近い時刻の陽光が、石畳の上に白い斑点をつくっている。足裏に石の凹凸を感じながら、湧上さんの後について幅の狭い小径を歩いていく。左手には人の背よりも高く積まれた昔ながらの石垣が続ぎ、右手の生垣には淡い色の\*ブツソウゲの花が咲き誇っている。歩いている間、ちらちらと光りながら流れていく水の気配をずっと傍らに感じている。小暗い草陰にある泉から湧き出し、この辺り一帯に張りめぐらされた水路を通って流れつづける水の気配を。

② 小径はやがて、舗装された道路にぶつかる。角を曲がると、私たちがそれにa)つて歩いてきた、屋敷囲いをめぐらせたb)キユウ家の正面に出る。立派な\*ヒンブンを設えた門の内側には、なかば立ち枯れた背の高い常緑樹が三本、年とつた番人のように並んでいる。

③ 「ここは水田だったんです。……ええ、もう全部、水田だったですよ。」

道路の向こう側に広がるサトウキビ畑と、その果てに横たわる低い山並みの方を見やりながら、湧上さんがそう言う。その穏やかな声音とともに、低山のふもとまでなだらかに広がり、青々と風にそよぐ水田の景色が浮かんできてくる。その頃に水源から引かれ、枝分かれしながら何枚もの田んぼを潤していた水路は、いまなお、サトウキビ畑の間を貫いて、ちらちらと光る水を運んでいるはずだ。

④ 「この木はですね、フクジギ、\*フクギ。これね、ずっと植えられていたんですよね、枯れてしまつて。それで私、子どもの時はこの木に登つて、枝渡りをしてね、向こうまで。稲の収穫の時は、ここに積みよつたもんですからね、稲わらを。それで、上から飛び降りたりしてね……。」

裸足で木の上によじのぼり、枝にぶら下がってはわら塚の上に飛び降りて、わらくずにまみれて笑い転げている少年たちの姿が眼に浮かぶ。そのそばで忙しく立ち働いていたはずの大人たちは、せつかく積んだ稲わらの山を滅茶苦茶にしてしまう彼らを叱つたのだろうか。それとも笑つて、放つておいたのだろうか。

⑤ この集落や近隣の\*字で生まれ育つた、かつての少年や少女たち。その人たちに案内されて集落の小径や、畑や森の中を歩くと、何十年も前にそこにあつたはずの景色が甦つてくるような心地がする。その頃、周囲に満ちていたはずのさまざまな音や匂い、風と光の感触とともに。

⑥ 夏の日盛りひざかに田んぼの畦道あぜみちを歩いていくときのむっとした草いきれ。朝方、近所の製糖工場から聞こえてくるリズムミカルな機械の音。月のない夜、親の後をついて山道を歩いていくときの闇やみの深さ。夜の庭先に充満じゅうまんする草木の匂い、家畜かちくたちのたてるくぐもった音。水田の上に蒼々あおあおと広がる\*天穹てんきゅう。

⑦ あまりにも多くのものが、いまはもうそこになく、微かな痕跡こんせきしか残されていない。かつてここにいた人たちも、家畜たちもいなくなり、集落の景色も日々の営みも変わってしまった。この石置と石垣、あの山並みと空、高台から見晴るかすことのできる海はまだ、ここにあるのに。

⑧ それでも、その場所を指差して<sup>1</sup>語る人の声とまなざしは、かつてそこにあったものたち、そこに生きていた人たちの姿を束の間つか、懐かしいものとして浮かび上がらせる。

⑨ そしてまた、そうした声やまなざし、残された痕跡や空間を指し示す身ぶりを通して、この土地に刻まれたもうひとつの歴史と時空間の層が、不意に露あわになることがある。

⑩ 「……そして、戦争の時はですね、向こうからやられたときはこちからも大砲たいほうを撃うつて、西の方に向けて弾たまを撃うつたわけですよ。もしたら瞬またたく間に反撃はんげきされて……けっこう、この辺には亡なくなった兵隊の亡骸なきがらが、田んぼだったけんどね、田植えするときに骨が出てきた。」

陽光のさすサトウキビ畑と山並みの方を見やりながら、淡々たんたんとした口調で湧上たぎさんはそう続ける。いま目に映る景色の奥おくにうつすらと浮かんでいた、土埃つちぼろりの道と風にそよぐ青田、光と水の気配に満ちた風景は、その言葉とともに俄にわかに色を失う。かわりに現れてくるのは、黒い森の上にたなびく\*硝煙しょうえんと、生きものの気配の消えた焼け焦げた地面だ。

⑪ そうだった。ここもまた、戦場だったのだ。この場所だけではない。湧上たぎさんの語りに出てくるいくつもの土地の名前、私を案内してくれたいくつもの場所はどれも、少年の日に彼の体験した戦争の記憶きおくと結びついている。

⑫ すぐそばにいるその人の存在、みずからの経験と記憶の一端いったんを語るその声と仕草を通して、<sup>2</sup>目の前の景色がその色を一変させるように、ある場所に刻み込まれた出来事の残像が浮かび上がってくる。いま・ここにある風景はそうやって幾重いくえにも重層化し、奥行きを増していく。語られた言葉とその場所の醸かみだす空気、光や影かげといったあらゆるものが\*渾然こんぜんとなって私の中に流れ込み、ときに\*茫漠ぼうぼくとした、ときに鮮やかなイメージをつくりだす。それらは泡あわのように儂はかなく不確かなものだけれど、何十年もの時を経

て、その場所に私たちがともに立ち、ある出来事について思いをめぐらせ、問いかけと応答を重ねながらそれを言葉にしていくという、ある意味で奇跡のように\*稀有な\*邂逅を通して受け渡され、私の中に生まれてきたものだ。

⑬ たとえそれが泡のように儂く、不確かなものであったとしても、それでもそのときに受けとったひとつの言葉とまなざしを辿り、いま・ここにある風景と過去の光景の間を往き来しながら、それらの事どもを<sup>3</sup>書き留めてみたい。そうしなければ、消えてしまうかもしれないものを。それは私の出逢った人たちが語ってくれたことであり、各々の場所に残された出来事の痕跡や断片であり、そして、それらにふれることを通して私の中に生まれてきたイメージや思考、感情の一部でもある。

⑭ そのそれぞれの間にはきつと、小さくないずれや裂け目があるだろう。出来事をめぐぐる事実<sup>4</sup>は部分的にしかわからず、語り手の経験そのものにふれることはできず、感じとつたすべてのことを言葉にすることは不可能だ。それでも、それらのずれや綻びを覆い隠すのではなく継いでいくように言葉を探し、自分という存在を通してその出来事を、その時・その場所にいた誰かの経験を、その声の震えや温みとともに伝えようとすることが——当事者ではなく、近親者でもなく、その場所を偶然訪れた他人にすぎない私がそうしたことを試みるのが、過去といまとを、遠くと近くを、\*彼岸と此岸を往き来しながらつなぐことに、わずかなりとも寄与するかもしれない。

⑮ そのようにして誰かれから受けとつた言葉を自分の裡にくぐらせ、その人の声を底に湛えた別な声、その人のまなざしと交差する別なまなざしを通して伝えようとする。その限界を自覚しながら、迷い、ためらい、それでもできるかぎり注意深く。それはひとつの試みであり、応答であり、問いかけでもあるだろう。でも、誰に向かつて？ そうした声と言葉とまなざしは、いったい誰のものであり、誰に向けられているのだろうか。

⑯ この土地を訪れて話を乞うた余所者である私を受け入れ、時間をかけて、自分の人生に起こったことを教えてくれた人たち。それらの出来事が起こった場所、自分が人生の一時期を過ごした場所をひとつひとつ確かめながら、一緒に歩いてくれた人たち。なまなましい痕跡の残るいくつもの廃墟を、下生えをかき分け、岩の裂け目をくぐり、暗闇に踏み入って案内してくれた人たち。そして、その人たちの語りや残された痕跡を通して私の出逢った、いまはもうこの世にいない人たち。あまりにも多くの、けれども一人一人独自の顔と声と来歴をもった、誰かにとつての愛おしく懐かしい人たち。

⑰ 「その人たちのために」と、でも、私が言うことはできない。その人たちのために書き、その人たちのために祈ると、たやすく口に

することは。ただ、できることなら——もしも許されるなら、<sup>5</sup>あなた方に恥じないものを、どうか書くことができますように。  
⑱ そのように、私は祈る。海に<sup>C</sup>ノゾむ丘を覆う亜熱帯の樹々や、茜の空に浮かぶ壮大な雲々や、空と混じりあつた深い海の色を眼裏に浮かべながら。

⑲ この文章の宛先は、だから私の出逢つた幾人もの語り手たちであり、私を導いてくれた案内者たちであり、彼らの背後にいる大勢の死者たちである。同時にそれは、いま生きて、そばにいる身近な人たちであり、私のまだ出逢っていない誰かであり、私のいなくなつた後の世界に生きているはずの誰かでもある。

⑳ そのようにして語りだされ、書き留められ、伝えられた言葉はきつと、それを受けとつたそれぞれの人の思いや感情や記憶をdオリ込み、少しづつかたちを変えながら、さまざまな声や言葉とつながっていくだろう。そのときどきに違う言葉で、異なる声と旋律で歌い継がれ、風につて広がっていく歌のように。<sup>6</sup>宛先のない祈りのように。

(石井美保「石畳の小径」による)

### 語注

ブツソウゲ……アオイ科フヨウ属の低木。ハイビスカス。

ヒンブン……沖繩の伝統的な建築物で、門の内側に設けられた、目隠し兼魔除けの役割をもつ塀。

フクギ……フクギ科フクギ属の常緑高木。沖繩、奄美群島等で防風林・防潮林として植えられる。「フクジギ」も同じか。

字……町村内を分けた区画、集落。

天穹……天空。大空。

硝煙……火薬の発火によって起こる煙。爆弾や銃器が用いられた後に発生する。

渾然……別々のものが一体となつていて区別がつかない状態であるさま。

茫漠……ぼんやりしてつかみどころのないさま。

稀有……めつたにない、めづらしいこと。

邂逅……思いがけず出会うこと。めぐりあい。

彼岸と此岸……あの世とこの世。

問一 この文章は、まず前半(湧上さんの体験を聞く場面)と後半(それをふまえて筆者が考えや思いを述べているところ)に分けられます。さらに前半は話題の変化で二つに分けられ、後半は「書き留めたいという思い」と「書き留めたものの届け先について」の二つの内容に分けることができます。その四つのまとまりを順に意味段落二、三、四としたとき、意味段落二、三、四の最初の形式段落の番号を答えなさい。

問二 ——1 「語る人の声とまなざし」とあるが、なぜ「言葉」ではなく、「声とまなざし」という表現が用いられているのか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、ア、イの記号で答えなさい。

ア 言葉では簡単に嘘をつけるが、声やまなざしは本人の感情と直結していて嘘をつけないから。  
イ 情報の中身だけではなく、言葉以外の雰囲気から、実際にあったということが強く伝わるから。  
ウ 言葉は方言で不確かだったが、声の力強さ、まなざしの揺るぎなさから本当だと確信できたから。  
エ 信じがたい内容だったが、声とまなざしから本当に懐かしんでいる様子がありありと分かったから。  
オ 語られた内容に加え、その人の身ぶりは土地に刻まれたもうひとつの時空間の層を浮かび上がらせたから。

問三 ——2 「目の前の景色がその色を一変させる」とあるが、湧上さんの話によって、どのような景色がどのような景色に変わったのか。A、B、Cの空らんに入るように文章中の言葉を用いて説明しなさい。

意味段落一 サトウキビ畑と低い山並みの景色がA 一〇字程度 の景色に変わった。

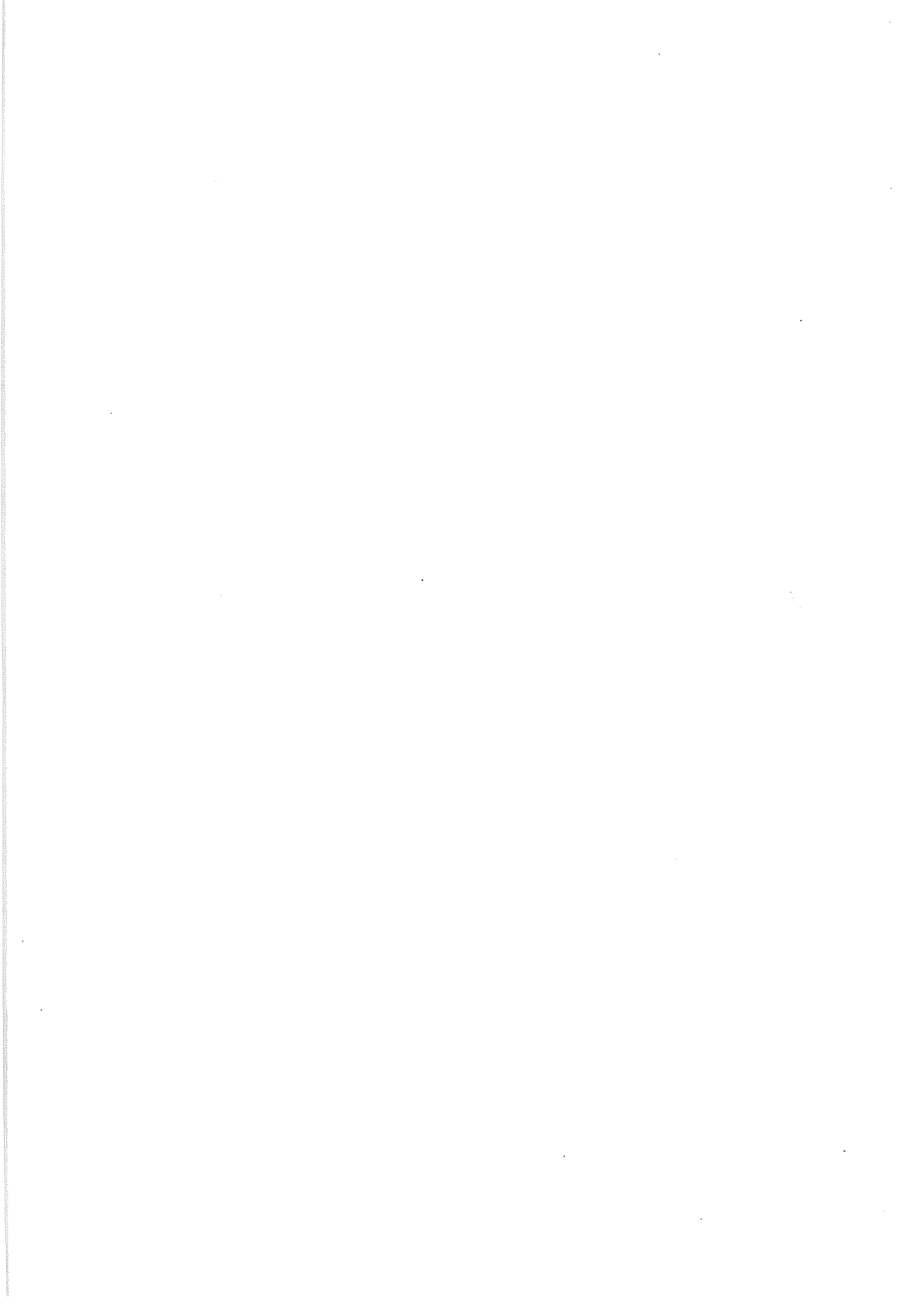
なかば立ち枯れた背の高い三本の常緑樹の光景がB 二五字程度 光景に変わった。

意味段落二 サトウキビ畑と低い山並みの景色の奥に浮かぶAの景色がC 二〇字程度 の景色に変わった。



このページより後ろは白紙です。





# A 国語

26

解答用紙

受験番号
氏名

- 問一  二  三  四

問二

問三 A  
の景色

B  
光景

C  
の景色

問四

問五  
はじめ  
おわり

問六

問七

問八  
a ソ  
って  
b キユウ  
c ノゾ  
む  
d オ  
り